

紫色は青色か？

— 日本語とドイツ語の「紫」の色彩語について —

城 岡 啓 二

jjksiro@ipc.shizuoka.ac.jp

0. はじめに

1. 西洋と日本の「紫」の特殊性

1. 1 キリスト教の聖書と「紫」

1. 2 古代日本の「紫」

2. 色彩語の実際の使用例から「紫」を考える

2. 1 花の色と「紫」と「青」

2. 2 ブドウ、ブルーベリー、サヤインゲン、カササギの羽の光沢

2. 3 紫色の唇、青筋、内出血の紫斑などの色彩

2. 4 「煙」の色と「紫」

3. 色彩科学の成果から

3. 1 「青」の波長から「紫」をとらえる

3. 2 色相のマンセル値から

4. 動植物の命名から「紫」を考える

4. 1 紫色の青いキノコとかなり青いオオムラサキ

4. 2 命名における色彩語の頻度

5. 日常語における「紫」の頻度、重要度

6. 締めくくるにあたって

0. はじめに

これまでドイツ語の文献などに目を通して、色の記述に納得できないことが何度もあった。とくに日本語で紫色のものがドイツ語で青色にされることがあるという印象がある。一例をあげれば、酸性かアルカリ性か判断するリトマス試験紙があるが、リトマス試験紙に使われているリトマス色素の色は、日

本語では紫色とされている。「リトマスゴケ・サルオガセなどの地衣類から得られる紫色の色素」(『ハイブリッド』, 辞書や図鑑など頻繁に引用する参考文献は略記で示しているが, 末尾に書誌情報をまとめておく), 「紫色の無定形粉末」(『世界大百科』, 『大百科全書』)のように, リトマス色素の色は紫色である。ところが, ドイツ語で Lackmus をしらべると, どれも blau で, 「青色」の色素としている。blauer Farbstoff (「青い色素」, ULdS), blauer Naturfarbstoff (「青い自然の色素」, WDW), aus Lackmusflechten gewonnener, als Indikator verwendeter blauer Farbstoff (「リトマスゴケから得られる青い色素で, 指示薬として用いられる」 DU)。なぜ日本語の紫色はドイツ語では青色なのだろうか。現代のドイツ語にも violett や lila といった紫色の色相をあらわす語があるが¹⁾, これは日本語の紫色には対応していないのだろうか。また, violett や lila (「紫」) と blau (「青」) はどのような関係にあるのだろうか。色彩語にはそのあらわす色相に一定の範囲があるはずであるが, ここまでは blau で, ここからは, violett や lila だと言えるような明確な関係にあるのだろうか。

1. 西洋と日本の「紫」の特殊性

「紫色」の色相は, 古代においても現代においてもよく分からないところがある。何のための染料なのか疑問に思えるほど高価だった西洋の「貝紫」とその色相の謎, 「この貝1万個からとれる色素がわずか1.5グラムであるため非常に高価で, ローマ時代は皇帝と元老院議員のローブにだけ用いられ「帝王紫」とよばれた。」(『大百科全書』)。また, 日本における紫草の紫根の希少性と官吏の身分によって色彩を決めたり, 色彩を自由に使わせなかったりといった日本における歴史的な事情を考える必要がある。

1. 1 キリスト教の聖書と「紫」

地中海諸国や西洋の貝紫が関連している色相の問題は聖書で使われる色彩語に端的にあらわれている。聖書には色彩語は驚くほど少ない。複数回出てくるものとなると, 「赤」と「緋」と「白」と「紫」ぐらいである。その他の色彩語については, 新共同訳聖書のコンコルダンス(新教出版社, 1997)でしらべると, 「黒」が1回, 「紅(くれない)」が1回, 「黄色」や「緑色」, 「橙色」, 「灰色」, 「ピンク」などは出て来ない。「青」や「青色」は索引項目としては採りあげられていないが, 「真紅の織物, 緋の織物, 青の織物を扱う熟練した者」という表

現「歴代誌下」に出てきている。「緋色」と「紫」と「青」には英語の purple やドイツ語の Purpur の語源である「チリアンパープル」「貝紫」が関係しているらしい。今でも聖書に出てくる「紫色」の色相は確定していないらしく、食い違いが激しい。具体的にいくつかの個所を日本語とドイツ語と英語の現代語訳から取り出してみよう、使用したドイツ語訳聖書は電子ブック版で、die Version 1.0 der Pattloch Hausbibel für Electronic Bookplayer というものである。

【歴代誌下，2:6】

(1 a) 日本語訳

従って、今、金、銀、青銅、鉄、真紅の織物、緋の織物、青の織物を扱う熟練した者で、種々の彫刻にたけた者を一人こちらに送ってください。(新共同訳)

(1 b) ドイツ語訳

Schicke mir nun einen fähigen Mann, der Arbeiten in Gold, Silber, Erz und Eisen, rotem Purpur, Karmesin und violettem Purpur ausführen kann und sich auch auf Gravierungen versteht! (Pattloch Hausbibel)

(1 c) 英語訳

Now send me a man with skill in engraving, in working gold, silver, bronze, and iron, and in making blue, purple, and red cloth. (Good News Bible)

【エステル記，8:15】

(2 a) 日本語訳

モルデカイが紫と白の王服に、大きな黄金の冠と白と赤の上着を着け、王の前から退出してくると、スサの都は歓声に包まれた。(新共同訳)

(2 b) ドイツ語訳

Mordekaj ging vom König fort in einem königlichen Gewand aus violetter Purpurwolle und Linnen, mit einer großen goldenen Krone und einem Mantel aus Byssus und rotem Purpur. Die Stadt Susa jubelte und frohlockte. (Pattloch Hausbibel)

(2 c) 英語訳

Mordecai left the palace, wearing the royal robes of blue and white, a cloak of fine purple linen, and a magnificent gold crown. Then the streets of Susa rang with cheers and joyful shouts. (Good News Bible)

【ヨハネによる福音書, 19:2-3,】

(3a) 日本語訳

兵士たちは茨で冠を編んでイエスの頭に載せ、紫の服をまといせ、そばにやって来ては、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、平手で打った。(新共同訳)

(3b) ドイツ語訳

Die Soldaten flochten einen Kranz aus Dornen und setzten ihn auf sein Haupt, legten ihm einen purpurroten Mantel um, traten vor ihn und sagten: >> Heil dir, König der Juden! << Und sie schlugen ihm ins Gesicht. (Pattloch Hausbibel)

(3c) 英語訳

The soldiers made a crown out of thorny branches and put it on his head; then they put a purple robe on him and came to him and said, "Long live the King of the Jews!" And they went up and slapped him. (Good News Bible)

歴代誌下, 2:6	エステル記, 8:15	ヨハネによる福音書, 19:2-3
(日)深紅, 緋, 青	紫, 白	紫
(独) rot, Karmesin, violett	violett	purpurrot
(英) blue, purple, red	blue, white	purple

「歴代誌」の部分では、英語訳で blue と purple があるが、日本語訳には「紫」はない。ドイツ語訳では violett があるが、「青」はない。「エステル記」の部分では、日本語訳が「紫」と「白」なのに英語訳では blue と white になっている。ドイツ語訳では「白」は訳されず、「青」ではなく violett になっている。「ヨハネによる福音書」では、日本語訳が「紫」で英語訳が purple、ドイツ語訳は purpurrot だからイエスに着せたのは深紅色の服ということになる。なお、「ヨハネの福音書」の部分については、三宅 (1988:31) によると、新共同訳以前の口語訳では「紫色の」とされ、カトリック訳では「緋の」となっていて、食い違っていたのだと言う。

貝紫 (チリアン・パープル, ロイヤル・パープル) は紫の染料といっても、『国際版色の手帳』で見ると、「ブーゲンビリア」に近い赤紫の色見本になっているし、OED2でも purple は古い使い方ではクリムゾン色 (in early use meaning crimson) だとしている。名詞のパープルについては、古代何を意味していたか説明して、Anciently, that of the dye obtained from species of gastropod

molluscs (Purpura and Murex), commonly called Tyrian purple, which was actually a crimson と書いている。古代の貝紫は、基本は紫みの赤で深紅色や緋色ということになりそうだが、しかし、実際に貝紫がどのような範囲の色だったかは必ずしもそれでおしまいにはならないらしい。聖書の記述で「青」になったり「紫」になったり、「赤」になったりするのはそのためである。Gipper (1964) はパープル研究家の A. Dedekind の研究の紹介をしているが、貝紫は、使われる巻貝の種類 (140 種ぐらいあるという) も色彩に影響を与えるし、最初はクリーム色 (milchig-weiß) の粘液は太陽にさらされると、色に変化し、黄色から緑色になり、青から暗い赤あるいは紫色 (gelb über grün, blau bis zu dunkelrot oder violett) に変化するのだという。しかも、この色の変化のどの過程でもその進行を止めることができるのだという。

それでも、古代の貝紫の色が基本的には赤に近い色 (深紅, 緋色, スカーレット, クリムゾン) だったと考えられているようだが、そうだとすると、現代のパープルの色相は英語やドイツ語やフランス語では英語だけが青寄りの方向へ移動して紫色の色相をあらわす色彩語になっている。したがって、ドイツ語やフランス語のパープルは「紫」の色相の色彩語ではない。pourpre は「緋色の、深紅の」(『クラウン仏和辞典』, 第 4 版, 三省堂, 1995) であるし、ドイツ語の Purpur も同様である。独和辞典の編集者は英語の purple と語源が同じという事実に惑わされているのか、「紫に近い」とか「紫がかった」という限定をつけている辞書が多いが、基本的には「深紅, 緋色」であり、赤の色相の色彩語なのである。和独辞典の記載はやや不適切で、「紫」をしらべると、第一に Purpur をあげているものがかなりあるようだ(『和独辞典』, 白水社, 1963, 『コンサイス和独辞典』第 2 版, 三省堂, 1976, 『郁文堂和独辞典』第 3 版, 1996)。最近の独独辞典では、さすがに、名詞の Purpur のところには「濃い赤の色素 (ein Farbstoff, der intensiv rot ist)」(LGDaF2) となっていて、紫みや青みについては触れていない。もっとも、Lehmann (1998) によれば、ドイツ語の場合だが、現在ほとんどのひとは Purpur と言ってもどういう色相なのか分からないけれども、たとえば王衣ならば Purpur だという程度の理解をしているという。

英語圏の研究者には英語の purple と語源が同じ色彩語が別の色相をあらわすという事実が理解しにくいと見え、Hayes, Margolis, Naroll, and Perkins (1972) では西欧各国語の基本色彩語の比較をテーマにしながら purple 相当のドイツ語とフランス語の色彩形容詞として purpur (そもそもほとんど使われていない語

形であるが、辞書にある正しい形容詞の語形は purpurn である) や pourpre を対照させるといふ決定的な誤りを犯している。

1. 2 古代日本の「紫」

日本語の紫の色相は中国語とのかかわりでも問題になる。中国語の「紫」という字であらわされる語が日本語の「紫」と一致していないことをしめす例がいくつかある。サルスベリは「百日紅」と書くが、この漢字の組み合わせは日本で作られたものである。漢名は「紫薇」で「紫」が使われている。日本では紅であるから赤系の色相とみなされる色を中国では紫と見ていたようである(福田 1979, 208)。また、日本語の緋色が中国で紫とされた例もある。「中国と日本とでは色の内容が違い、遣唐使の緋色の衣が中国の文献に紫と記載されるような事態も起ったのである。」(水尾 1979, 165)。中国語の紫色がかなり赤色に近い色まで指示することは、「紫色盆地」とも言われる四川盆地を「19世紀四川を調査したリヒトホーフェンは〈赤盆地 Red Basin〉と名づけている」(『世界大百科』, 「四川」) ことからもうかがわれる。さらに、「紫蘇」や「紫檀」という語は日本語でもこのように表記するが、この紫も日本語であるというより中国語である可能性が高い。紫蘇は中国南部が原産地らしい。赤紫色というふうにも言われるが、アカジソとも言うわけだから、日本語の感覚では必ずしも紫色というわけでもない可能性がある。赤紫蘇は園芸植物としてはドイツでもガーデニングに利用されるらしく、ドイツ語では Shisoあるいは Schwarznessel (「黒」+「イラクサ」) と言う。Dekorative Küchengärten (Brigitte Stein, Stuttgart, 1999) というハーブについての本の中では、赤ジソの葉の色を dunkelbraunrot (「暗い」+「茶色」+「赤」) と説明している。紫檀については、「心材は均一ではなく、赤褐色・濃紫色・黒色などの縞模様があり、赤みを帯びた木肌には甘い華麗さがある」(『原色インテリア木材ブック』, 宮本茂紀, 建築資料研究社, 1996, 「ホンシタン」) という記述があった。ここでは「濃紫色」と紫も使っているが、これは無意識のうちに「紫檀」という名称から引き出された可能性もあるし、赤褐色と黒色との3者択一のはなしであるし、そもそもこれは縞模様の木目部分について言っているのであり、木材全体としては赤みを帯びた木肌とされているのである。写真を見てもわたし自身の判断では紫色に見える部分はない。また、『世界の有用木材 300種—性質とその用途』(社団法人 日本木材加工技術協会, 1975) ではシタンを *Dalbergia cochinchinensis* としたうえで、「心材は濃色であるが均一でなく赤褐色, 濃褐色, 黒色などの縞を示す」として、「紫」

は記述中にまったく含まれていない。他の外国語でも紫系の色相語にならないことは、英語でも red sandalwood²⁾といわれることから分かる。

万葉集にある「韓人の衣染むとふ紫」(4・五六九)は、先進国であるカラ(中国・韓国)の人が染めるという紫についてのもので、伊原(1988:34)によると、この歌がつくられた頃はまだ紫草や紫染めが伝来したばかりで、色彩語としては確立していなかったと考えられるのだという。同じく万葉集に額田王に「茜さす紫野ゆき 標野ゆき 野守は見ずや 君が袖振る」があるが、この頃は紫(紫染めの色)は赤と考えられていたという説がある。「『あかねさす』とは、アカネで染めた赤色が美しく映えるさまをいう。この句を『紫』の枕詞に選んだということは、作者が紫野の紫草から染めあげられる紫色を赤いアカネ色に擬したということである。紫という色が『赤し』の範疇に属していたことを裏書きする枕詞の使用法であった。」(佐竹 1986, 49)。もし「紫」が「赤」の一種なら「紫」はこの時代の日本語の基本色彩語ではないということになる。そればかりか、「紫」が植物としての紫草や紫根、紫根から取れる染料やその染料で染めた紫根染めの布しか指していないような場合には、つまり、何か全然無関係なものの色について紫が使われているのでなければ、色彩語としての「紫」はまだ確立していないと言える。聖書のパープルはすべてこのレベルであるから色彩語としては本格的には確立していなかったといえるだろう。『色の和名抄』や『色の手帳』に集めてある古典の用例を見ると、紀貫之集には「藤の花もとより見ずば紫に咲ける松とぞおどろかれまし」(紫草は白い花をつけるので「紫に咲ける」は明らかに色彩語としての紫である)があるし、宇津保物語に「むらさきの雲に乗れる天人七人」があるから、たとえ万葉集の頃には紫色が色彩語としてまだ確立していなかったとしても、少なくともこの頃(10世紀)には色彩語の「紫」が確立していたことになるだろう。少なくとも日本語の色彩語「紫」には1000年の歴史があるわけである。

ただし、古代の色彩語のあらゆる色相の範囲は推定がかなり難しいようで、上で見たように、「紫」を「赤」の一種と考えていたという推定もあるわけだが、「日本古代の、それも古い時代」には「あお」という色彩名でよばれていた色は、緑色から、青緑、青色、青紫を経て、紫までだったという見解もある。根拠は示していないので詳細は不明だ(前田 1980, 33)。しかしながら、服飾の色彩規定は早くから実行されていて、今日ならトップの政治家や高級官僚に相当する天皇を取り巻く政府高官は紫色の服を着ることになっていた。律令制における位色は、1位から9位までが「濃い紫(深紫)」、「薄い紫(浅紫)」からはじ

まって「濃い青（深縹）」、「薄い青（浅縹）」で終わっていたわけで、「紫」が最上位で、「青」が最下位である（時代によって色彩規定の順位には若干の異同がある）。色によって位を見分けるのだから、この時代にすでに「紫」と「青」の区別がこの方面のひとたちのあいだでは当然のこのようにできていたはずだ。

2. 色彩語の実際の使用例から「紫」を考える

小説などの文章から色彩語を考える方法もあるが、しかし、小説などに出てくる色彩語は衣類の色や靴や帽子的色だったり、要するに人工物の色であることが多い。人工物の色に固有の色はない。固有の色がないものでは、言語間の比較は難しい。たとえば、ドイツ語で書かれた小説に「黄色い服」を着た女性が出て来ても、それと日本語の「黄色い服」の違いを考えるのは容易ではない。鈴木（1990）がフランス語で「黄色い靴」が「明るい色調の茶」をさすことがあり、「黄色い封筒」で「茶封筒」を指す使い方があり、日本語とフランス語の色彩語の用法の違いを明らかにできたのは幸運な事例だと思う³⁾。小説などのテキストデータが「紫」の日独対照に使えないのにはもう一つ決定的な理由がある。ドイツ語の「青」や「赤」なら基本色彩語であるから小説などの文章中にも多く使われるが、「紫」はすべて低頻度語彙であり、使われていないから用例は得られそうにないということなのである。たとえば、グリム童話で violett や lila を探しても無駄である。使用例はない。語彙数の少ない辞書の記述にもこれらのドイツ語の「紫」はほとんど使われていない。日常語辞典である DBW のパソコン版を全文検索しても、violett は見出し語と他の見出し語の関連語として出てきているだけである。なにかの色彩の記述に使われているということはない。lila は語源的にライラック色という意味であるが、この語もライラック（Flieder）以外では唯一アザミ（Distel）の記述に使われているに過ぎない。ということで、ドイツ語の「紫」を実際の使用例から探るなら、大型の辞書や百科事典や個別分野のやや専門的な文献を使う必要がある。

一般に、固有の色があるのは自然現象であったり、動植物の色である。わたしが目をつけたのは動植物である。動植物で好都合なのは、学名を手がかりにすれば、同一種であるかどうか知ることができるということである。独和辞典や和独事典に記載のない動植物であっても、また記述が不正確であっても、その気になれば、学名をもとにそれぞれの言語でどのような名称を付けられているか自分でしらべることができる。同じ動植物であることがはっきりすれば、

今度はそれをもとにそれぞれの言語でどのような色彩語で記述されているかしらべることができる。とくに園芸植物の世界では、場合によっては、メリクロン栽培や挿し木による完全に同一の個体が世界中で栽培されているわけで、色彩語をしらべるには持って来いの条件である。ただし、写真やカラー印刷が幅をきかせる今日、図鑑やガイドブックが色彩語をつかって色彩を記述してくれているとは必ずしもかぎらない。

2. 1 花の色と「紫」と「青」

私たちを取り巻く自然界では色彩は一様に分布しているのではない。自然界の色彩はあきらかに偏りがある。身近な紫色のものと言えば、人工のものを除けば、花の色と果実の色以外には考えにくいのではないだろうか。また、「青」も日本語を取り巻く自然界（妙な書き方であるが、これは本稿の結論のひとつ）では分布が限られている。武井（1975:218）では、大自然の色彩を5色にわけた図を載せ、黄・赤・紫を花の色としている。青は空や水の色だという。「草木は、茶色の大地に根づき、緑の葉をしげらせ、紫・赤・黄などの花を開く。そこで足りない色相があるとすれば青だろう。しかし、それには、空の青がある。あるいはまた、空のかわりに、清い川のせせらぎであってもよい。いずれにしても、空と水の青さによって、自然界には、美しくも赤・黄・緑・青・紫と、すべての色相が出そろふことになる。」。「青」を花の色としていない点に注目したい。日本語の世界では、どうやら、青は花の色としては少ないと考えられているようだ。実際、「緑や青の花は、現実にはほとんど存在しないが、青みの紫色になると、いろいろな花の名前があつて、色名に使われるようになる」（福田 1979, 203）という見解もある。さらには、花の色だけでなく自然界には青は少ないという見解もある。「青い花、青い鳥と同じく宝石も青色のものは少ないので、サファイアは古くから珍重されています」（近江 1996, 185）。日本語における「青」の希少性をノバーリスの「青い花」やメーテルリンクの「青い鳥」にまで関連づけようという見方までである。「青は、自然界に少ない色で、ノバーリスの小説『青い花』（1802年刊）における青い花も、メーテルリンクの戯曲『青い鳥』（1908年初演）における青い鳥も、人間の求めるロマンや幸福の象徴として描かれている」（小学館辞典編集部編：『色の手帳』, 1986, p.150）。日本人にとってどうか、日本の文化では、自然には「紫」が多く、「青」が少ないというふうになるだろうか。

村山（1988:216-218）では、表千家編集の『茶と美』という茶花の本に出て

いる約 280 の茶花の約 440 の花の色を数えた結果をしめして、白い花が 120 種類、赤い花も同じくらいで、それに次ぐのが紫の花で約 100 種類あったのだという。ちなみに、紫の次が黄色の 60 種で、それ以下の橙、緑、藍（紺）、褐色、灰色、金色、銀色になるとぐっと少なくなるのだという。村山（1988）は「紫色の花」が「白い花」や「赤い花」と並んで茶花として突出しているのは茶人の好みの反映としているが、そうとばかりは言えないのではないだろうか。やはり、紫色の花は日本語の世界ではもともと多いのではないだろうか。

『岩波国語辞典』第五版の記述から青い花や紫色の花を探してみる。まず、紫色の花だが、「黒紫色」「紫紅色」「紅紫色」「青紫色」「赤紫色」はかぞえないことにした。かぞえたのは、「薄紫」「紫」「淡紫色」「濃紫色」としてあったものである。赤紫色は紫色ではないというひとがかりにあっても薄紫が紫色ではないというひとはないだろうと判断したわけである。また、「黄色い点のある淡紫色を帯びた白い花」（「しゃが」）のような場合にはやはり紫色の花としてはかぞえていない。どのあたりまでを「紫」と決めるかというのは容易ではないと思われるし、ひとによってもことなるだろう。たとえば、村山（1988）は「紫色の花は多い」として、彼自身のコトバで「淡紫色」「淡紅紫色」「青紫」「紅紫色」の花を紫色の花としてあげている。「紅紫色」というのはアザミの色として辞書などでよく採用されている色彩語だが、この色はおそらく「紫色」と判断しないひともいるだろう。また、東山（1979:177）は「一口に青といっても青緑から青、青紫に至る色相の変化の種々相」と書いているが、「青紫」を「青」とみなしていることになる。しかし、たとえば青紫の花を青い花ということは日本語の場合あまりないように思われる。なお、下のデータでは、実際に辞典にあった色彩の記載内容を添えた。

【『岩波国語辞典』の「紫色の花」】（合計 36 種類）

1. あけび 「薄紫の花」
2. いかりそう 「いかり形・淡紫色の四弁花」
3. いちはつ 「紫色または白色の花」
4. えぞぎく 「紫・うす紅・白などの大きな頭状花」
5. えんどう 「白または紫の蝶形の花」
6. かきつばた 「濃紫の美しく大きい花」
7. かぜくさ 「紫色の花穂」
8. かんぞう 「淡紫色蝶形の花」

- | | |
|---------------------|--------------------------------|
| 9. ぎぼし | 「花の色は、白・紫・淡紫など」 |
| 10. きり | 「淡紫色の花」 |
| 11. クロッカス | 「花の色は黄色が普通で、紫・白などある」 |
| 12. けし | 「紅・紫・白などの花」 |
| 13. サフラン | 「薄紫色の花」 |
| 14. さんしきすみれ | 「紫・白・黄の三色をもった花」 |
| 15. シネラリア | 「紅・紫・青・白等の美しい花」 |
| 16. スイートピー | 「白・赤・紫などの蝶形の美しい花」 |
| 17. すみれ | 「濃い紫の小さい花」 |
| 18. なす | 「淡紫色の花」 |
| 19. にわげきしょう | 「紫または白で紫色の筋がある小形六弁花」 |
| 20. はなしょうぶ | 「紫・白（共に基部中央が黄色）・黄などの大形の美しい花」 |
| 21. びじょざくら | 「花は赤・白・紫等」 |
| 22. ひなぎく | 「白・淡紅・紫などの小形の花」 |
| 23. ふじ | 「薄紫や白の花」 |
| 24. ふじばかま | 「薄紫の花」 |
| 25. ベゴニア | 「花の色は赤・紫・黄・白など」 |
| 26. ぼたん | 「紅・白・紫などの美しい花」 |
| 27. ほていそう | 「淡紫色の花」 |
| 28. ほとけのざ | 「紫色の唇形の花」 |
| 29. みやこわすれ | 「濃紫色の花」, 「淡紫色・紅色・白色のもの」 |
| 30. むくげ | 「淡紫色・淡紅色・白色などの五弁花」 |
| 31. むらさきつゆくさ | 「紫の三弁花」 |
| 32. ゆきわりそう | 「白・紅・紫・桃色等の小花」 |
| 33. よめな | 「薄紫の頭状花」 |
| 34. ライラック(むらさきはしどい) | 「淡紫色でかおりのよい花」, 「白・赤・青などの園芸品種も」 |
| 35. ラベンダー | 「薄紫の小花」 |
| 36. りゅうのひげ | 「淡紫色の小花」 |

【『岩波国語辞典』の「青い花」】(合計3種類)

- | | |
|----------|-----------------|
| 1. シネラリア | 「紅・紫・青・白等の美しい花」 |
|----------|-----------------|

2. ライラック(むらさきはしどい) 「淡紫色でかおりのよい花」, 「白・赤・青などの園芸品種もある」
3. わすれなぐさ 「青色の小形の花」

青い花は3種類しかなかったわけだが、紫の花にくらべてあまりにも少ない。紫の花が36種類に対して青い花が3種類である。しかも、日本の花では古来より青色の染色にも使われた月草(鴨頭草)、現代、露草と呼ばれている花さえ出てきていない。実は、これは『岩波国語辞典』では露草の花の色が「あい色の可憐な花」となっているためである。しかし、他に「あい色の花」と記載されているものはなかったし、「水色」や「紺色」もなかった。「あい色の花」と記載されている露草を青い花として数えたとしても36対4で、紫色の花が青い花の9倍で、紫色の花が圧倒的に多いことは間違いない。

しかも、「青」か「紫」か問われればおおかたのひとが「紫」と答えるだろう。「青紫色の花」を上では紫色の花として数えていない。青紫色の花を咲かせる植物として、『岩波国語辞典』は、アジサイ、オダマキ、キキョウ、トリカブト、ヘリオトロープ、リンドウをあげている。また、「紅紫色」も「紫」と分類されることもありそうだが、上ではやはり数えていない。紅紫色の花を咲かせるのは、アザミ、アジサイ、オイランソウ、カタクリ、サクラソウ、ジギタリス、シュンラン、シラン、ハギ、ハナズオウ、マツバギク、ミソハギ、ミヤマキリシマ、ムベ、モクレン(シモクレン)、レンゲ、ワレモコウとかなり多い。また、わたし自身なら紫色には分類しない赤花ジンチョウゲであるが、ジンチョウゲとオキナグサが『岩波国語辞典』で赤紫色の花と記載されていた。

それでは、ドイツ語の世界でも花の色として「紫」が多く、「青」は自然界に少ないのだろうか。手元にあったロックガーデンについての園芸書が各種の花を表に示していて、花の色の記載があったので、これを利用してしらべてみた。

【ドイツの園芸書にある花の色】

(Almuth Scholz: Steingarten. München, 1999)

- 1位: 32 weiß (「白」)
- 2位: 17 rosa (「ピンク」)
- : 17 gelb (「黄色」)
- 4位: 14 rot (「赤」)
- 5位: 13 blau (「青」)

- 6位： 6 lila (「紫」)
7位： 3 keine (記載無し)
 : 3 bunt (複色)

69種類の植物だが、ひとつの植物に複数の花の色があるので、延べ数の合計は105になる。この本では、花の色として6種類の色彩語しか使っていない (weiß, rosa, gelb, rot, blau, lila). rosa (「ピンク」) は使っていても orange (「オレンジ」) は使っていない。オレンジ色は赤か黄色に分類されるのだろう。紫については lila を使っているわけだが、日本語の場合とはことなり、「青」 (blau) のほうが2倍ちょっとある。つまり、ドイツ語では「青い花」はめずらしくはなく、むしろ、ここで見たように、「紫色の花」よりも多いことが分かる。

それでは、『岩波国語辞典』でしらべたようにドイツ語の辞典で「青色の花」と「紫色の花」をしらべてみよう。DUは見出し語が12万語ぐらいあり、かなり大きな辞書である。この辞書の花の色の記載では、ロックガーデンの本とことなって lila よりも violett のほうが多かった。下のデータでは lila が使ってあったものはそのまま色彩形容詞を残した。参考に和名が分かれば添えたが、厳密なものではない。場合によっては「ベロニカの仲間」のようなしめし方になっている。

【DUの紫色の花】(合計47種類)

1. Augentrost (コゴメグサ, 他に白)
2. Basilikum (バジリコ, 他に白)
3. Billbergia, Billbergie (アナナス・パイナップルの仲間, 他に青)
4. Bocksborn (クコ属)
5. Bohnenkraut (シソ科の植物, 他に白)
6. Buddleja (ブuddleヤ, 紫 (lilafarben))
7. Distel (アザミ, 他に白)
8. Eisenkraut (クマツヅラ, 淡い紫 (blaßlila))
9. Enzian (リンドウ, 他に青花, 黄花, まれに白花)
10. Flieder (ライラック, 明るい紫から暗い紫 (hell-bis dunkellila))
11. Glyzine, Glyzinie (フジ, 他に青花や白花)
12. Gundelrebe (カキドウシ, 他に青, まれにピンクや白)
13. Heliotrop (ヘリオトロップ, 青みの紫)

14. Karde (オニナベナ, 他にクリーム色)
15. Kartoffel (ジャガイモ, 他に白とピンク)
16. Kichererbse (ヒヨコマメ, 白から紫)
17. Kornrade (ムギナデシコ, ムギセンノウ)
18. Krokus (クロッカス, 他に黄と白)
19. Kuhschelle (オキナグサ属, 明るい紫)
20. Lavendel (ラベンダー)
21. Levkoje (アラセイトウ, 白から紫)
22. Lobelie (ロベリア, 青, まれに紫や白)
23. Löffelkraut (トモシリソウ属, 他に白)
24. Luzerne (ムラサキウマゴヤシ, 青から紫, 他に黄色)
25. Malve (マロウ, ピンクから淡い紫 (blaBlila))
26. Minze (ミント, たいていは紫 (lila))
27. Mohn (ケシ, 他に黄と白)
28. Nachtviole (ハナダイコン, 他に白)
29. Patschulipflanze (パチヨリ, 他に白)
30. Petunie (ペチュニア, 他に赤と白)
31. Pfefferminze (ペパーミント)
32. Pfennigkraut (洋種コナスビ, 明るい紫, 他に白, 同名異種もある)
33. Rhododendron (ツツジ, シャクナゲの仲間, 他に赤, 黄, 白)
34. Rosmarin (ローズマリー)
35. Schalotte (エシャロット, 紫 (lila))
36. Schleifenblume (マガリバナ属, 他に白, 赤)
37. Sojabohne (ダイズ, 他に白)
38. Sperrkraut (Polemonium 属の植物, 他に青, 白)
39. Strandgrasnelke (紫 (lila), 他にピンク)
40. Süßholzstrauch (カンゾウの仲間, 他に青, 白, 黄)
41. Thymian (タイム, 明るい赤から紫)
42. Tradeskantie (ムラサキツユクサ, 他に白, 赤)
43. Veilchen (スミレ, 青から紫)
44. Waldvogelein (キンラン属, 他に白っぽい)
45. Wiesenschaumkraut (ハナタネツケバナ, 淡い紫 (blaBlila) から白)
46. Wicke (ソラマメの仲間, 他に青, 赤, 白)

47. Zinnie (ヒヤクニチソウ, 白, 黄, 赤から紫)

【DUの青い花】(合計 39 種類)

1. Akelei (西洋オダマキ, 他にオレンジの花や黄色の花)
2. Billbergia, Billbergie (観賞用アナナス, 他に紫)
3. Borretsch (ボリジ)
4. Ehrenpreis (ベロニカの仲間)
5. Enzian (リンドウ, 他に黄花, 紫 (lila) の花, まれに白花)
6. Gedenkemein (ワスレナグサに似た花, 他に白花も)
7. Glockenblume (カンパニュラ, 「たいていは青」)
8. Glyzine, Glyzinie (フジ, 他に白花や紫 (lilafarben))
9. Guajakbaum (グアヤク, 他に紫紅色)
10. Gundelrebe (カキドウシ, 他に明るい紫, まれにピンクや白)
11. Günsel (キラソウの仲間, 他に黄色)
12. Herbstaster (アスターの仲間, 他に白)
13. Hortensie (アジサイ, 他に白花, 緑がかった花, 赤花)
14. Immergrün (ヒメツルニチニチソウ, 他に赤や白)
15. Jungfer im Grünen (クロタネソウ, 他に白)
16. Klematis (クレマチス, 他に白)
17. Kornblume (ヤグルマソウ, 輝く青 (leuchtendblau))
18. Kreuzblume (ヒメハギ属, 他に白花, ピンクから赤の花)
19. Kugeldistel (アザミの仲間)
20. Lattich (レタス, 他に黄色い花)
21. Leberbalsam (アゲラツム, 他に白)
22. Leberblümchen (スハマソウ, まれにピンクや白)
23. Lein (アマ, 他に白, 黄色, 赤)
24. Lobelie (ロベリア, まれに紫や白)
25. Luzerne (ムラサキウマゴヤシ, 青から紫, 他に黄色)
26. Rittersporn (デルフィニウム, 他に赤, 白)
27. Speik (アルプスのプリムラ的一种)
28. Sperrkraut (Polemonium 属の植物, 他に紫, 白)
29. Stranddistel (アザミの仲間)
30. Süßholzstrauch (カンゾウの仲間, 他に白, 黄色, 紫)

31. Szilla (シラー)
32. Teufelskralle (Phyteuma 属の植物, 他に白, 黄色)
33. Traubenhyazinthe (ムスカリ)
34. Veilchen (スマイレ, 青から紫)
35. Vergißmeinnicht (ワスレナグサ, まれにピンクや白)
36. Wegwarte (チコリー)
37. Wicke (ソラマメの仲間, 他に紫, 赤, 白)
38. Ysop (ヒソップ, まれにピンク)
39. Zineraria, Zinerarie (シネラリア)

『岩波国語辞典』の場合と同じように「青」や「紫」とかぞえなかった色彩形容詞がある。列挙すると, blauviolett (「青紫」), violettblau (「紫青」), rotviolett (「赤紫」), rötlich-violett (「赤っぽい紫」), lilaret (「紫赤」), bläulich (「青っぽい」), rosaviolett (「ピンク紫」)である。

DUの結果を見ると, ドイツの園芸書からのデータとはことなり, 紫色の花が青い花より多くなってしまったが, 紫色の花 47 種類に対して青い花が 39 種類なのだから, 両者にそれほど違いがあるわけではない。少なくともはっきりしたことは, ドイツ語で「青い花」は少なくないということである。上記の花の中には園芸的に利用されているものもあり, 日本とドイツで同じ植物が栽培されている場合がある。日本語とドイツ語の園芸書の記載も参考にしながら, 個別具体的に, 検討してみよう。上記のリストをながめてまず言えることは, 日本で「青い花」がドイツ語圏では「紫色の花」を咲かせるということはないということである。ということで, 両言語のずれの方向には規則性がある。ずれるのは, 日本語では「紫の花」を咲かせるドイツの青い花があるという点である。アゲラツム, クレマチス, ムスカリ, ヒメツルニチニチソウがそうだ。ムスカリは, 『切り花』に「青紫の花」と「白花」とあるし, 『鉢花』に「青紫のほか, 白花や八重咲き」と書いてある。それが, DUでは「青い花」になっていて「紫」とされていない。ムスカリはムスカリ属の植物のことで, SDPによると, 地中海地域に 50 種ぐらい自生しているが, ドイツでも多くの種が家庭園芸で栽培されているとあるから, ドイツで栽培されている種類が特殊な種で日本で見られるものと色が違うということはあたらな思われる。『鉢花』の記述で面白いのは, 「青紫」としておきながら外来語の「ブルー」を使っていることである。「まとまった面積をブルーで埋めるように群植する」という助言を書

いている。アゲラツムについては、「花色は藤色、紫、白、複色など」（『鉢花』）とあるから、日本語では「青い」とは考えられていない。ヒメツルニチニチソウ（*Vinca minor*）は、日本では同属の別種ツルニチニチソウ（*Vinca major*）とともによく栽培される植物である。ドイツの別のガイドブックもしらべてみたが、GU Naturführer Blumenと Der neue BLV Naturführer für unterwegsの両方で花の色は hellblau（「明るい青、水色、空色」）とされていた。ヒメツルニチニチソウの花の色は、『ペレニアル』では「薄紫、青紫、赤紫、白」とされている。『ハーブ』でも「紫や白色」となっている。

また、日本語では「紫色の花」とされるのにドイツ語では「紫」とされることもあるが「青」とされることもある花がいくつかありそうだ。アルファルファとフジとスマレがそうだ。アルファルファ（*Medicago sativa*）は、和名がムラサキウマゴヤシであるところを見ると、日本語では文句なく紫色なのだろう。DUでは、blau から violett あるいは gelb（「黄色」）としている。『学生版牧野日本植物図鑑』（牧野富太郎、北隆館、1967）では「淡紫色」とある。この植物はドイツにおいても牧草として重要な植物だったようだ。Ewiger Klee（「永遠のツメクサ」）という言い方もあるらしいが、正式には Blaue Luzerne という名前であり、名前にも「青い」が含まれている。伝統的には青い花と考えられていたと思われる。同様のケースがフジで、フジはドイツ語では外来語系を使うと、Glyzine, Glyzinie, Wisterie という言い方になるが、実は、完全にドイツ語の名前もあって、Blauregen（「青い雨」）と言う。名称には古い色彩分類が反映されている可能性もあるわけだが、Helmut Jantra（Blumengarten, Kosmos Garten-Bibliothek, 1995）では、フジの説明として青い花の房（blaue Blüentrauben）をつけると書いている。今でもドイツ語の世界ではフジの花の色、つまり藤色は青い色という分類もなされているということになる。もっとも、フジの花の色は DU は blau から violett としていたわけだが、blauviolett（「青紫」）だとしている本もあった（Kleine Gärten planen und gestalten, München, 1995）。とはいえ、日本語なら藤色といえば当然紫になると思われる。青いフジなど思いもよらない。園芸的に利用されている様々な色を記述するとしても、「薄紫、白、ピンク」（『ツル性植物』、ブティック社、1998）ぐらいで、「青」ははいらないと思われる。なお、ドイツで栽培されているフジだが、日本で普通のフジの種（*Wisteria floribunda*、和名はフジ、ノダフジ）がまさにもっとも普通に栽培されているらしい。

スマレの場合は色彩語 violett の語源にもなった花なので、すこし詳しくみてお

こう。スマイルの色は blau とする伝統もあるからだろうか (Veilchenblau 「スマイルの青」), グリムの辞書 (J. Grimm/ W. Grimm: Deutsches Wörterbuch. Leipzig, 1854-1960) は violett について, 「本来は『スマイル色の』であるが, ふつうはもっと赤みや深紅色の色合いのある青色に (使われる)」 (eigentlich 'veilchenfarbig', gewöhnlich aber von einer mehr ins rothe, purpurne spielenden blauen farbe) としているし, Der Neue Brockhaus (Wiesbaden, 1973-1975) という百科事典には violett の語義の説明として, 「色相を表わす語で, たいていはスマイルの『青』よりも少し赤みのある場合に使われ, おおよそ 550 nm の補色波長をもつ」 (eine Farbtonbezeichnung, meist etwas rötlicher als das "Blau" des Veilchens, etwa mit der kompensativen Wellenlänge = 550 nm.) としている。これらの記述を信じるなら, スマイルの色はドイツ語ではスマイル色でないこともありうることになる。スマイルがスマイル色でないなら, 青色とするしかない。DU の記載でも blau bis violett (青から紫) となっていたのはこのような見方が関係しているだろう。ドイツ語ではスマイルの花は必ずしも紫色ではなく, 青の領域とのあいだで揺れ動いているわけだが, 日本語ではスマイルの色はスマイル色であり, 紫色であると考えられていることは間違いない。長崎 (1996: 257) に「堇色」の説明として「堇の花のような艶麗な紫色をいう」としている。また, 日本には何十種類もスマイルがあるわけだが, その花の色の説明として「花の色は紫が多いが, それも淡いものから濃いものまであり, さらにピンクや白, 黄色などのバリエーションがある」(パキラハウス: 『週末のナチュラルリスト』, 講談社+α文庫, 1997) と書かれたりしている。青の気配はどこにもない。ドイツ語では, 植物事典 SDP でスマイルをしらべると, 「青から青紫か黄色が多い」 (oft blau bis violett oder gelb) とあり, やはり, 種類や個体によって青いスマイルも認める記述だ。しかも, 日常的にあまり使われない violett や lila という色彩形容詞を使わないひとにとっては当然スマイルの色は blau になるだろう。「ひどく酔っ払っている」という意味で Er ist blau wie ein Veilchen. (かれはスマイルのように青くなっている) という言い方もドイツ語には残っていることを考えると, スマイルを blau とする傾向はまだ続くように思われる。

ちなみに, スマイルの色を「青」とする見方はドイツ語だけでなく, 英語にもあるようだ。1986 年のアメリカ映画に「すみれは, ブルー」がある。主演はシー・スペイセクとケビン・クライン。原題は, Violets are blue となっている。辞書の記述でも violet という色彩形容詞の説明として「スマイルの色の, 青または青紫色の」 (Having the colour of violets; of a blue or bluish-purple colour.

OED2, “violet”), と書かれている。

森 (1992) にある blau で終わる合形成容詞のリストによると、植物名が前につく blau は, enzianblau, flachsblau, fliederblau, kornblumenblau, lavendelblau, pflaumenblau, veilchenblau, vergißmeinnichtblau がある。Kornerup と Wanscher の色彩事典には、さらに、clematisblau, glockenblumenblau, hyazinthblau, lupinenblau, ritterspornblau が出ている。植物名を列挙すると、リンドウ、アマ、ライラック、ヤグルマソウ、ラヴェンダー、プラム (ブルーベリー)、スマイル、ワスレナグサ、クレマチス、カンパニュラ、ヒアシンthus、ルピナス、デルフィニウム。このあたりが、かつては様々な青を記述するのに使われた植物で、「青」の範囲に含めて考えられた植物ということになるのだろう。ラヴェンダーは DU では violett となっていたわけだが、ちょっと探すと、blaue Blüten (「青い花」として) している本 (Helmut Löffler: Naturheilkunde von A-Z. Ullstein, 1993) がすぐ見つかるというのは、やはり、今でも「青」として見られがちであるということだろうか。「クレマチスの青」については、DU の記載でも blau か「白」とされていた。日本ではあまり見かけないが、クレマチスにはたしかに青い品種もある。しかし、一般的には紫系の色のものが多い。日本の園芸書ではクレマチスの色は「紫、赤、桃、白、黄」(『ペレニアル』)、「紫、ピンク、赤、黄、白」(『ツル性植物』、ブティック社、1998) のようになっている。なぜドイツ人が「紫」をクレマチスから見落とし、日本人が「青」を落としてしまうのだろうか。

2. 2 ブドウ、ブルーベリー、サヤインゲン、カササギの羽の光沢

赤ワイン用のブドウの色を手がかりにドイツ語の「青」を考えてみる。フランスで黒ブドウとされる赤ワイン用のブドウの品種に Pinot noir (ピノ・ノワール) があるが、ドイツでは赤ワイン用の品種としてはもっとも栽培面積が大きく、Blauer Spätburgunder (「青い」+「遅い」+「ブルグンドの (ブドウ)」) という名称になっている。オーストリアやスイス東部ではこの品種は Blauer Burgunder (「青い」+「ブルグンドの (ブドウ)」) や Blauburgunder と名称がすこし変るが、やはり「青」が出てくる。ピノ・ノワールはドイツ語圏では青ブドウと考えられていることは間違いない。同様に、名称とは裏腹にオーストリア起源の品種で、赤ワインの品種としてはオーストリアでもっとも栽培面積の大きい Blauer Portugieser (「青い」+「ポルトガルの (ぶどう)」) や Blaufränkisch (「青い」+「フランク族の (ブドウ)」) がある。他にも Blauer Wildbacher や Blauburger

という主にオーストリアで栽培されている赤ワインの品種がある。ブドウの色を blau (青) と捉えるのは奇妙に思えるかもしれないが、これは赤ワインの定義を辞書で引いてみると、赤ワイン用のブドウの色を「青」ととらえるのはドイツ語では一般的にとらえかただということが分かる。赤ワイン (Rotwein) について具体的な記述を載せているドイツ語の辞書・事典類なら、どれも少なくとも「青ブドウ」は書いてある。赤ワインとは、「青いブドウか赤いブドウからつくられるワイン (Wein, der aus blauen oder roten Trauben gemacht wird)」(LGDaF2) であるし、「青いブドウからできる赤いワイン (roter Wein aus blauen Trauben)」(WDW) のことなのである。さらに、ブドウはドイツ語で一般に何色と考えられているかしらべてみると、「果実は種類によって青、赤、緑、黄色である (Die Früchte (Weinreben) sind je nach Sorte blau, rot, grün oder gelb)」(SDP)。ブドウの実の色を blau (青), rot (赤), grün (緑), gelb (黄) としているわけだ。この4大別もドイツ語ではふつうのようだ。LGDaF2でブドウ (Traube) をしらべると、よく使われる結びつき (コロン) がしめしてあるが、やはり、< weiÙe/ grüne/ rote/ blaue, kernlose Trauben > となっていて、この4色が出ている。日本語では、「赤ワインは、黒か濃い赤色のブドウを使い」(斎藤義政:『くだもの本』, 新潮文庫, 1986) となっていて、「黒ブドウ」や「赤ブドウ」が赤ワイン用のブドウということになる。また、DBWの赤ワインの定義を見ると、「(青い) ブドウからつくられる、黒っぽい紫みのある色のワイン (aus [blauen] Trauben gemachter Wein von dunkler, ins Violette spielender Färbung)」と書いていて、ワインの色には紫みを感じているようであるが、ぶどうの色に紫みを感じていない記述になっている。現在、日本で果物として出回っている品種では、巨峰やベリーAのようなブドウが黒ブドウになるようだが、この系統の色がドイツ語では「青」になる可能性が大きい。ブドウの色にしてもブルーベリーの色にしても、表面が白っぽい粉を吹いたようになっていて色の判別が難しい。表面自体の色ではなく、粉の奥の色を想定しているのかもしれない。こんな場合、日本語ではおうおうにして紫色が想定される傾向があるようだ。ベリーAは『くだもの本』では、「濃い紫色」になっているし、巨峰も「紫がかった濃い黒色」と記述されている。

カナダ産のブルーベリーがスーパーで買えるのでじっくり観察してみた。FRESH BLUEBERRIES と BLEUETS FRAÎCHES と英語とフランス語で書かれている。英語やフランス語だけでなくドイツ語でも Blaubeere といったりするから、ブルーベリーの色を青いと見ている。しかも、名前の上で青が使われているとい

うだけでなく、辞書を見ても、青いと書いてある。しかし、どう見てもわたしには青には見えない。表面の色そのものを問題にするなら紫色にも見えない。黒だろうか。ただし白い粉を吹いたようになっていて、色彩がはっきり見えない。はっきり見えない色彩を、日陰の白いイスが実際には灰色であるはずでも白く見えるように、ある種の推定作業をしているのであろうか。この推定作業の結果が、日本語ではおうおうにして紫が出てくるのではないだろうか。「ブルーベリーはツツジ科の植物で真夏に、丸く小さな美しい青紫の実がなる。」(天野秀二：『図説世界のくだもの366日事典』、講談社+α文庫、1995)、「こけももの一種で、青紫の実」(『日本食材百科』)。ブルーという語を使う場合も、「紫がかかったブルーのととてもきれいな実」(斉藤義政：『くだもの本』)というふうに「紫がかかった」とされる。ドイツ語では violett や lila を使った記述は今のところ見つけていない。GU Naturführer Blumen の Heidelbeere (Blaubeere の別の言い方) の項目に Frucht eine dunkelblaue Beere (「暗青色の果実」) だったり、Frucht blauschwarz, weißlichblau bereift (「熟すと青黒くなるか白っぽい青になる果実」) (Kurt Harz: Bäume und Sträucher) だったり、どこにも「紫」は出てこない。SDP でも blauschwarz (「青」+「黒」) だ。また、ブルーベリーの実は実際に黒い表面に白い粉がふいているようにみえるが、たんに黒としているものもある。Beeren schwarz (「ベリーは黒」) (Garms 1969, 70)。また、オーストリア方言の辞書には見出し語として「黒いベリー」(Schwarzbeere) があって、いわゆるブラックベリー(ドイツ語では Brombeere) ではなく、ブルーベリーのこととしている。ブルーベリーの色は黒と見る見方もドイツ語圏に存在しているということになる。

サイインゲンにはサヤが緑色のものの他に薄い黄色のものと紫色のものがある。Dekorative Küchengärten (『美しいキッチン・ハーブの庭』) という題名の本ではこの紫色のサイインゲンが blau (「青い」) になっている。紫色の「青いサイインゲン」なのである。「黄色のものは歯ざわりがよくサラダに向いているが、青いのは味がいい」としたうえで、「青いのは煮ると緑色になる」とも書いている。日本色彩研究所の配色カード129aから近い色を探すなら dk 22 の「くらいむらさき」が相当していると思う。紫色のサイインゲンは日本で見かけないように思うが、ないわけではないらしい。「品種によって赤紫色の斑紋があったり、赤紫色をしているものもある」(農文協編：『カボチャ・エンドウ・インゲン・ソラマメ・エダマメ・その他のマメ類』野菜園芸大百科6, 農山漁村文化協会, 1989, p. 264) とあるから、これが対応しているのであろう。ただし『美

しいキッチン・ハーブの庭』の写真のサヤインゲンは紫色であっても、赤紫までは行っていないように思う。

この節ではブドウとブルーベリーとサヤインゲンで日本語とドイツ語の色彩記述が「紫」をめぐるずれているのを見てきた。動物では紫色のものがあまり見当たらないが、鳥のカササギの羽の色の記述でやはり「紫」と「青」に関して日本語とドイツ語の記述がずれることを発見した。カササギ(学名は *Pica pica*)などの比較的大きな鳥は飛翔力も大きいらしく、分布範囲も広いことが多い。カササギの場合は、完全に同一種がドイツと日本に分布している。ただし、日本の分布は筑紫平野だけで、17世紀に朝鮮半島から持ち込まれたと推定されている。ドイツ語では *Elster* と呼ばれる鳥である。カササギはカラスの仲間で、カラスもそうだが、羽には独特の光沢がある。日本語では「緑色や紫色光沢のある黒色」(『フィールドガイド 日本の野鳥』, 日本野鳥の会, 1982)となるわけだが、ドイツ語では、予想通り、「青色の光沢や緑色の光沢」*blauschillernd, grünschillernd* (GU Naturführer Vögel. München, 1984) になっていて、「紫色光沢」が「青色の光沢」に変わっていた。

2. 3 紫色の唇, 青筋, 内出血の紫斑などの色彩

人体の一部が青色や紫色に変色する現象がある。「青色や紫色に変色する現象」と書いたが、これが本当にそのような現象なのか、単にそう表現するだけなのか。

ドイツで出版されている日本語学習辞典 (Langenscheidts Lernwörterbuch Japanisch. 1993) の *murasaki* のところには次の用例がある。

長い時間泳いでいたので、くちびるが紫色になりました。

Weil er so lange geschwommen ist, sind seine Lippen blau geworden.

寒くてふるえているような時の唇の色は、日本語では紫色である。唇はもともと赤みがあるからこれに何らかの理由で青っぽい血液の色が加われば、「赤」と「青」の混合になるわけで紫色に見えるのが当然なのかもしれない。唇が紫色に変色する医学的な理由はわたしには分からないが、静脈血は青っぽい日本語で「青筋」、ドイツ語でも *blaue Ader* と言うし、何らかの理由でヘモグロビンと酸素の結合が妨げられると、やはり血液は青みを帯びるものようである。「唇が紫色」というとき、ドイツ語では英語と同様「青」を使う。しかし、こ

の場合は日本語の感覚、つまり唇の色に紫色の色相を感じるというのが正常なのかもしれない。となると、ドイツ語で「青」と表現するのは violett や lila が頻度の低い外来語で、基本的な色彩語ではないからなのだろうか。日本語では「唇」は紫色であるが、「顔」は青いと言う。「青白い顔」であり、「青ざめた顔」に「青い顔」であり、「まっ青な顔」になるのであって、「紫色の顔」とは言わない。また、血管については「青筋」と言うが、「紫筋」とは言わない。しかし、血管については、日本語ではふつうは「青い血管」と表現されるようだが、谷崎潤一郎が『痴人の愛』で「白い下にうすい紫の血管が、大理石の斑紋を想わせるように、ほんのり透いて見える凄艶さです」のように書いているし、竹山道雄は『ピルマの豎琴』で「彼は額にも首筋にも血管を紫いろに怒張させて、口もきけないほどにはげしくどまりました」というように、血管を紫いろにしている。同じように怒るときの血管の色にしても「青」を使って「男はこめかみに青黒く血管の筋を浮かべて怒鳴りはじめた」（沢木耕太郎：『一瞬の夏』）のように表現するひともある。また、『新潮100』には「紫色の顔」はなかったが、「いつもは血色のよい顔が寒さで紫っぽく変っていた」（福永武彦：『草の花』）というのがあった。また、英語についてだが、blue と言うけれども本当は purple だという記述をする辞書があるようだ（If your skin is blue, it is slightly purple colour, often because you are very cold. (Collins COBUILD English Language Dictionary. 1987). 結局、固定した言い回しの中では特定の色彩語が使われるとしても「青」なのか「紫」なのかは容易には決められないのではないかと思う。

ところで、人体の一部が青色や紫色に変色する現象を医学的にとらえた表現に「チアノーゼ」と「うっ血」がある。うっ血とは「静脈血が異常に増加した状態」を指すコトバで、チアノーゼは「皮膚や粘膜が暗紫色となった状態」とある。チアノーゼのほうは血液中の「酸素と結合していないヘモグロビン量」がかかっているのだという（引用はどちらも『世界大百科』）。「チアノーゼ」や「うっ血」の際にはどんな色になるのか、医学的に厳密に観察され、色彩の記述にはゆれがないものと期待したが、いくつかの辞書・事典でしらべると、人体の「青」か「紫」の問題はかなり微妙な問題であるようで、決定することは困難であることが分かる。

	世界大百科	百科全書	ハイブリッド	広辞苑	ブリタニカ
チアノーゼ	暗紫色	暗青色	青紫色	青色	紫藍色
うっ血	暗紫色/暗青色	青藍色	暗青色	暗紫色	暗青赤色

人体の一部が青色や紫色に変色する現象には内出血や痣の場合もある。内出血はドイツ語では Bluterguß というが、Hämatom という外来語もある。このときの紫斑の色であるが、「皮膚の青変、次第に茶色から黄色に変わり、消失する (Blaufärbung der Haut, die beim langsamen Verschwinden bräunlich und später gelb wird)」(Krank, was tun? Bibliographisches Institut, 1986) とあるから、やはりドイツ語では「青」と考えられていて、「紫」は出てこない。日本語では紫斑という言葉はあっても「青斑」という言葉はなく、紫斑は「紫色」に決まっていると思われるが、現象自体は必ずしも紫色と捉えられているわけではないようだ。「全身の皮膚、粘膜、漿膜などに点状ないし斑状出血がみられる状態は紫斑と呼ばれる。紫斑は、はじめ赤紫色で、しだいに青から褐色、黄色に変わり、吸収されて消えるのが通常である。」(『世界大百科』「内出血」)。ドイツ語では、そもそも、紫斑に相当する表現も「青」を使う。「内出血の際には皮膚の下で青い斑点ができる (Bei einem Bluterguss bildet sich ein blauer Fleck unter der Haut.)」(LGDaF2)。また、日本語では紫斑というが、痣の場合は青痣になって、紫痣とは言わない。内出血の際にできる紫斑のことも痣と言うことがあると思われるから、日本語でも、体の一部にできる変色については、青か紫かは言い回しの中で固定しているだけなのかもしれない。痣を辞書でしらべると、「皮膚に生じる赤・(青・黒)色の広がり」(『新明解』)、「皮膚が赤色や紫色などに変色した部分」(『ハイブリッド』)と色彩記述が一致していない。『新潮100』で「●痣」(●は漢字一字)を検索してみると、「青痣」、「赤痣」、「黒痣」しか使われていない。「赤紫色に変色した痣」(北杜夫:『楡家の人びと』)という言い方は出てくるが、「紫痣」はない。

2. 4 「煙」の色と「紫」

『新明解』で「煙」をしらべると、「灰(白・紫・黒)色などの気体」とあって、「青い煙」は考えていない定義になっている。DUには、青い煙の例文があった。Aus den Gewehrmündungen puffte feiner, blauer Rauch. (「銃口から青い細かい煙が立ちのぼった」)。また、Kornerup と Wanscher の色彩語事典には「煙の青」(Rauchblau)という色彩語があるからドイツ語では「煙」と「青」の結びつきは自然なものなのだろう。『新明解』の定義にある「紫色の気体」ですぐに思い出すのはタバコの紫煙である。『現代和独辞典』(三修社, 1980)の「紫煙」に der [blaue] Zigarettenrauch とあるから、ドイツ語では強いて色彩語を使うなら「紫」ではなく「青」になるようだ。ところで、なぜタバコの煙

は青色や紫色に見えるのだろう。「煙草の火のついた部分から立ちのぼる煙の粒子は、高温のために非常に細かい。この微小な粒子に光があたると、短波長の光線・紫外線だけを反射するので紫がかって見えるのだ」(博学こだわり倶楽部1991, 40)。短波長の光線ということなら、別に青紫でなくても青も短波長の光線である。Kornerup と Wanscher の色彩語事典では、長波長の黄色や赤は通され、短波長の青が反射されると説明している。ただし、背景によっても見え方は変わり、明るい背景なら灰色か茶色に見えるとしている。短波長が比較的大雑把なものであるなら、「青い煙」であっても、「紫色の煙」であってもいいわけだ。日本語でタバコの煙を「青い煙」と言うことはあまりないようであるが、それは青く見えないということの意味していると言うよりは、言い回しとして「紫色に」固定していると考えたほうが当たっていると思われる。作家が自分の目に見える通りに記述すれば「青い煙」もあらわれておかしくない。事実、松本清張は『点と線』でタバコの煙に青い煙を使っている。「三原は、すぐ返事をせず、煙草をとり出して、鳥飼にすすめた。ライターを鳴らして火をつけてやり、自分も一本口にくわえて、ゆっくりと青い煙を吐いた。」

『新潮100』で色のついた煙を検索してみると、「青煙」は使われていなかったが、「青い煙」はけっこう使われている。「●煙」「●い煙」「●色の煙」「●の煙」(●には漢字一字の色彩語)をしらべた。他にも煙に漢字を使わない「黒いけむり」などの表記形もあるが、これは数えていない。頻度数2回以上のものだけしめしておく。

- 1位：51 黒煙
- 2位：16 白い煙
- 3位：14 白煙
- 4位：13 青い煙
- 5位：10 灰色の煙
- 6位：9 黒い煙
- 7位：7 紫煙
- : 7 紫の煙
- 9位：4 紫色の煙
- 10位：2 銀煙
- : 2 赤い煙

3. 色彩科学の成果から

3. 1 「青」の波長から「紫」をとらえる

色彩をスペクトルの波長で捉えるという、なにか非常に正確で科学的な印象をもってしまいが、最終的にどんな色に見えるかは人間の感覚の問題であり、何色に見えるかは言語の問題であるようだ。また、スペクトルにすべての色彩が含まれているわけではない。彩度の低い茶色は出て来ないし、薄い赤であるピンクもない。もっとも赤らしい赤もないという記述もドイツ語の文献には見られる。さらに、スマイレ色、青紫ではないような紫色（つまり赤紫よりの紫色）はスペクトルの連続的な変化にはあらわれない。紫はスペクトルの両端の長波長と短波長の複合色である。

光の波長と色彩語の関係は研究者によって微妙に違っていることはよく知られ、その方面の文献にはニュートン以来の何人かの研究者の結果がならべてしめしてあるものが多い。研究者の国籍や母語を記していないのは、いまだに言語による色彩語の色相の範囲の違いという可能性に理系の研究者は着目していないのだろうか。

百科事典などで色彩語をしらべると、波長でその範囲がしめしてある場合がある。ドイツで出版されている百科事典の記載は当然ドイツ語における波長と色相の関係を、日本で出ているものは日本語についての情報が提供されているものと見なすことができるだろう。実際、しらべてみると、ドイツと日本の百科事典などの波長と色相の記載は違っている。「紫」自体は単色光としてはスペクトルにスマイレ色までしか含まれていないので、比較するのが容易ではない。ここでは「青」についてしらべる。日本語とドイツ語の「青」の範囲の違いを見ることで、その隣の「紫」の違いを明らかにしようという意図である。

まず、ドイツ語の blau についてしめそう。

【 blau 】

440-485 nm (Meyers Enzyklopädisches Lexikon. 1971-1981)

440-485 nm (Der Neue Brockhaus. 1973-1975)

440-485 nm (ULdS, Mikrometer となっていたが、明らかな間違いなので訂正した)

440-490 nm (Bertelsmann Discovery 1995, CD-ROM)

4つの資料の数値はかなりそろっている。違いがあるのは Bertelsmann Discovery 1995 のデータだけである。それも緑色との境界領域の上限で5 nmのずれがあるだけだ。下限のスマイレ色との境界はどの資料でも440 nmになっている。

日本語の「青」についてしらべると、かなりデータにはデコボコがあるようだ。

【青】

450-455 nm (『世界大百科』)

450-500 nm (塚田：『色彩の美学』)

455-485 nm (川上・小松：『新版色の常識』)

467-483 nm (『大百科全書』)

ドイツ語の blau の場合とくらべてデータはかなり不揃いである点が気にかかる。とくに『世界大百科』の青の上限値はあまりにも低く、もっとも典型的な青の領域をしめしている可能性もあるだろう。「紫」は単独の波長にはないが、スマイレ色までは単独の波長で示せる色である。4つの資料でスマイレ色との境界である下限値に注目すると、ドイツ語の blau が440 nmであったのに対して、日本語では4つの資料の値(450, 450, 455, 467)はいずれも高くなっていて、日本語の青の下限値はドイツ語の blau の下限値よりも多かれ少なかれ高い値になっている。したがって、ドイツ人にとっては blau になる色の範囲の一部は日本語では「青」とは感じられず、次の色相であるスマイレ色の青紫と感じられることをしめしているわけだ。

さて、それでは、ドイツ語の blau は日本語の「青」よりもさらに青紫の領域まで blau と感じられているようであるが、ドイツ語の blau のスペクトル光の波長で440 nmが下限という点、日本語ではどのような色彩語が対応しているだろうか。江幡(1982:120-121)の日本色彩研究所配色体系(P.C.C.S.)の表には標準波長と対応する日本色名が掲載されているのでこれによると次のようになっている。

477 nm 青

469 nm 紫味青, 群青色

462 nm 青紫, 桔梗色

452 nm 青味紫, 薑色

440 nm までが blau だとすると、日本語の桔梗色や堇色は文句なしにドイツ語では blau になるということであり、逆から見ると、ドイツ語の世界では blau で通っているものの一部は日本語の世界では「紫色」になるということである。これは前章で確認した日本語とドイツ語の非対応を裏付けることになる。なお、堇色よりも紫の色相に行く場合は、単純に波長では表現できなくなる。典型的な紫色は赤色光と青色光の混合であるからだ。典型的な紫色の波長の数値は、P.C.C.S. では、566 c のように示されている。566 nm は緑味黄の色相に対応するが、紫色はその補色の関係と規定される。

3. 2 色相のマンセル値から

マンセル表色系はアメリカの方式で JIS はこれを採用しているのでアメリカ英語の色彩語と日本語の色彩語の比較はしやすいが、ドイツでは異なる方式のためドイツ語の色彩語のマンセル値は色彩関係の書籍などにも出ていない。また、彩度や明度が変われば色相に対する感覚は変わるものであるが、日本語の色相の代表的な値が JIS の「物体色の色名」(JIS Z 8102) に書かれているから、青から赤までをまず下にあげておく。

【JIS Z 8102-1985】

青	7 B-4 PB
青紫	9 PB-3 P
紫	6 P-9 P
赤紫	2 RP-7 RP
赤	1 R-6 R

Berlin / Kay (1969) は人類言語の色彩語の発展を図式化し、規則性を見出そうとした研究で、この分野の基本文献となっている研究である。アメリカ英語と日本語についてはマンセルの色票を使って、基本色彩語の範囲をインフォーマントによって確定したものが発表されているので、そこから色相値を読み取ると、次のようになる。

a. (アメリカ) 英語	b. 日本語
blue	7.5 BG-5 PB
purple	10 PB-10 RP
	ao
	5 B-7.5 PB
	murasaki
	7.5 PB-7.5 P

red

2.5 R-7.5 R

aka

2.5 R-10 R

Berlin / Kay の実験結果でアメリカ英語と日本語の差で顕著なのは、ao が 5 B から、blue が緑寄りの 7.5 BG から始まっている点だろうか。英語では『色の手帳』によればピーコックグリーンと呼ばれる色が 7.5 BG である。日本語では命名不能域になるが、かなり緑に近い色である。ao と blue については、もう一方の領域もちょっと納得できない結果になっている。ao が 7.5 PB までであるのに blue の領域は 5 PB で終わっている。あとで述べるが、園芸植物の世界では多くの紫色でブルーの花が流通していることから考えて blue のほうが「紫」方向へ伸びているはずなのにそうになっていないという点が不思議なのである。また、英語の purple が 10 RP まであり、日本語の murasaki が 7.5 P だからかなり差がある。英語ではほとんど赤に近い赤紫までが purple にふくめられている。10 RP と言えば、印刷の三原色の一つマゼンタよりもさらに赤寄りである。もっとも 10 RP の色相値で purple にされているのは、彩度も明度もかなり低い色でワインレッドのような色である。JIS の参考値と比較すると、どうやら日本語の実験結果では murasaki の範囲に赤紫がまったく含まれていないだけでなく、狭義の紫の色相も狭められていることが分かる。Stanlaw (1997) によると Berlin / Kay の日本語のデータはカリフォルニア在住のバイリンガルの日本人一人のデータであるというから、そのためだろうか。

4. 動植物の命名から「紫」を考える

4. 1 紫色の青いキノコとかなり青いオオムラサキ

キノコ図鑑をしらべると、名称に blau がつきながら紫色のキノコがある。

Blauer Lackpilz

Laccaria amethystina

Blauer Mehlschirmling

Cystolepiota bucknallii

このふたつは、キノコ図鑑 (GU Naturführer Pilze. München, 1987) の写真で見ても紫色だ。Blauer Lackpilz は、ドイツ語の解説を読むと、ひだも柄も amethystviolett となっているから、紫水晶のような violett なのである。それがドイツ名では blau になっている。別の図鑑 (Der Kosmos-Pflanzenführer) では tief violettblau (深い紫青) となっている。Blauer Mehlschirmling のほう

は柄が GU Naturführer Pilze では blaulila (「青紫」) になっている。Blauer Lackpilz だが、じつはこのキノコは日本にも生えているようだ。日本語の和名はウラムラサキと言⁴⁾い、やはり紫色と捉えられているようだ。

日本語でムラサキが付いているキノコがドイツで何と呼ばれているかしらべてみると、violett や lila が使われているものも見つかる。これが新しい命名なので violett や lila が使われているのかどうかは分からなかった。

ムラサキシメジ	Lepista nuda	Violetter Rötelritterling
ムラサキフウセンタケ	Cortinarius violaceus	Violetter Schleierling
コムラサキシメジ	Lepista sordida	Schmutziger Rötelritterling
オオウスムラサキフウセンタケ	Cortinarius traganus	Lila Dickfuß

チョウの命名についてしらべると、日本語でムラサキが名前の一部にあるチョウはかなりある。1冊のガイドブック(松香宏隆:『蝶』, PHP, 1994)でかぞえてみると、日本の国蝶であるオオムラサキを含めて10種あった(ムラサキシジミ, ラمامラサキシジミ, ムラサキツバメ, ムラサキオナガウラナミシジミ, ムラサキテングチョウ, ツمامラサキマダラ, メスアカムラサキ, リュウキュウムラサキ, ヤエヤマムラサキ, コムラサキ, オオムラサキ)。紫色といってもガイドブックの写真をわたしが見て判断したところ、せいぜい青紫で、かなり青色に近いものもありそうである。ということになると、ドイツ語では紫色の violett や lila ではなく、blau が使われるだろうと予想が立つが、残念ながら日本の蝶とヨーロッパの蝶は同一種のもものがほとんどないようで比較しにくい。コムラサキ(Apatura metis)はヨーロッパにはいないようだが、同属でよく似たチョウセンコムラサキ(Apatura iris)はヨーロッパでもよく知られた蝶のようだ。図鑑の写真や絵ではコムラサキとほぼ同じような色の羽をもつようである。この蝶の色は英語の世界ではpurpleになるようで、『蝶と蛾の写真図鑑』(デービッド・カーター, 日本ヴォーグ社, 1996)でも「紫色の輝き」と訳されているし、Male has a brilliant purple sheen when seen from certain angles. と Butterflies & Moths (Collins Gem Guide, Glasgow, 1981)と書いてある。そもそも英名も Purple Emperor という名前なのである。日本語で「紫」で、英語でpurpleであっても、スペクトルの波長から言っても青が青紫まで伸びているドイツ語ではblauになってもおかしくないわけであるが、事実、Garms (1969)にはGroßer Schillerfalterはbläulich schillernd(「青く輝く」)となっていた。

日本の蝶にムラサキが多く冠されているのは不思議である。オオムラサキにしてもコムラサキにしても、ムラサキシジミにしても紫色というよりは青色だと思われる。せいぜい紫みの青としか思われぬ。チョウセンコムラサキは上で見たように英語でも Purple Emperor となるわけであるが、もっと青に近いものもムラサキとされている。それがなぜムラサキになっているのだろうか。これは日本語のほうに原因がありそうだ。

さらに別の動物で「青」と「紫」が関係する命名をしらべてみると、北海やバルト海に大量に存在するクラゲで blau と表現される紫色のクラゲがいた。Blaue Nesselqualle (*Cyanea lamarckii*) というクラゲである。自然ガイドブック (Der Neue BLV Naturführer. München / Wien / Zürich, 1998) に出ている写真で見ると、明るめの色であるが、青紫ではなく、青みのない紫色をしている。SDT によると、別名として Kornblumenqualle (「ヤグルマソウ」+「クラゲ」) とも言われるようだ。どちらの本にも kornblumenblau (ヤグルマソウのような青色) という色彩形容詞を使って説明しているのだが、BLV の図鑑の写真では「ヤグルマソウの青」というよりもっと青みの少ない色に見える。

4. 2 命名における色彩語の頻度

命名は過去になされているわけで、必ずしも現代の状況を反映しているわけではない。動物事典 SDT に出ている動物名で色彩語が使われているものをしらべると、

【動物の命名に多い色彩語】

1 位 : rot (「赤」)	18
2 位 : blau (「青」)	8
3 位 : grau (灰色)	7
4 位 : weiß (「白」)	5
5 位 : grün (「緑色」)	4
: gelb (「黄色」)	4
7 位 : braun (「茶色」)	3
8 位 : schwarz (「黒」)	2

violett や lila, また orange といった最近の外来語はまったく使われていなかった。北隆館の『学生版日本動物図鑑』(新版, 北隆館, 1981) を利用して、動物

の和名の一部に色彩語がふくまれるものをしらべてみた。動物でも哺乳類のように色彩が華やかではないものがあるが、「紫」の付く動物はそれなりにいて、日本語では命名にも使われているようだ。

【動物の和名にふくまれる色彩語，日本動物図鑑】

1位：赤	65
2位：黒	50
3位：白	45
4位：青	26
5位：黄	19
6位：灰	9
7位：紫	8
8位：緑	4
9位：桃	2
10位：橙	1
：茶	1

「紫」が和名にふくまれている動物とは、「ムラサキイガイ」、「ムラサキイガイレイシイガイ」、「ムラサキインコガイ」、「ムラサキウニ」、「ムラサキカイメン」、「ムラサキクルマナマコ」、「ムラサキサギ」、「ムラサキハナギンチャク」の8つである。ドイツ語との違いで面白いのは、ドイツ語では「黒」のつくものがほとんどないのに対して日本語では「赤」について多い点が注目される。

5. 日常語における「紫」の頻度，重要度

頻度の差からは色相の違いは出て来ないが、「紫」と violett および lila の違いの一面が見えてくるだろう。violett や lila は比較的新しい外来語で頻度も低い。ドゥーデン語源辞典(Duden Das Herkunftswörterbuch. 1963)によると、violett は頻繁に使われるようになったのは17世紀/18世紀になってからだという。lila については、この語形は19世紀になってはじめて使われだしたらしく、それ以前は lilafarb(en) だという。lilafarb(en) にしても18世紀になって使われるようになったらしい。したがって、ドイツ語の「紫」の色彩語はたかだか二三百年の歴史しかない新しい色彩語であって、この点では日本語の紫とは比較できる

ような語彙ではない。

50万語からなる西南ドイツの口語資料に基づいた頻度辞典 (Arno Ruoff: Häufigkeitwörterbuch gesprochener Sprache. Tübingen, 1981) で色彩語の形容詞の頻度 (Ruoffの辞典は品詞別に頻度が計量されている) をしらべてみた。50万語程度のデータだとそれほど色彩形容詞は出てきていない。色彩形容詞の順位は次の通りであるが、violettもlilaも一度も使われていない。

1位	: weiß (「白」)	52
2位	: rot (「赤」)	38
3位	: schwarz (「黒」)	26
4位	: grün (「緑」)	17
5位	: blau (「青」)	11
6位	: golden (「金色」)	9
7位	: gelb (「黄色」)	7
8位	: rosig (「ばら色」)	3
9位	: braun (「茶色」)	2
10位	: grau (「灰色」)	1
	: rosa (「ばら色」)	1

Der Wortschatz im Grundschulalter (『小学生の語彙』, D. Pegel / G. Rickheit, Hildesheim/ Zürich / New York, 1987) は児童の話し言葉と作文をもとにデータを計量している。やはり品詞別に計量されているので、形容詞のなかから色彩形容詞を取り出すと次の通りである。

1位	: rot (「赤」)	1025
2位	: blau (「青」)	658
3位	: schwarz (「黒」)	650
4位	: weiß (「白」)	448
5位	: gelb (「黄色」)	321
6位	: braun (「茶色」)	261
7位	: golden (「金色」)	191
8位	: grün (「緑色」)	141
9位	: grau (「灰色」)	116

10位： blond (「ブロンド」)	94
11位： rosa (「ピンク」)	78
12位： hellblau (「明るい青(水色・空色)」)	37
13位： orange (「オレンジ色」)	36
14位： silbern (「銀色」)	28
15位： dunkelbraun (「暗い茶色(焦げ茶色)」)	17

Ruoffの順位と比較すると、rot(「赤」)の首位が目立ち、weiß(「白」)が4位まで落ちている。子供の語彙の特徴なのかもしれない。ドイツ語の「紫」については、violettやlilaは今度も一度も使われていない。頻度で見るとドイツ語の「紫」はほとんど使われていない色彩語であることは間違いない。

小説を対象に色彩語をかぞえると、ドイツ語でもすこしは「紫」が出てくるのか、ドイツの小説10作品を対象に色彩語をかぞえたもの(Lehmann 1998)には、violettが出てきている。しかし、このデータでもlilaは一度も使われていない。violettは3作品に合計6回使われていたようだ。1. schwarz(58), 2. weiß(45), 3. rot(27), 4. blau(15), gelb(15), grün(15), 7. grau(12), 8. braun(11), 9. violett(6), 10. rosa/rosarot(3)の順になっている。対象となったのは10作品⁵⁾のそれぞれ最初の50ページだという。

日本語で小学生が「紫」を知らなかったり、使わないということがあるだろうか。日本語については語彙統計をとった適当なものが見当たらないので比較できないが、幼児向けの辞典にも「むらさき」ははいつている。「文字を覚えはじめる幼児から小学生を対象に」書かれた『レインボーことば絵じてん』(学習研究社、1995)の「いろ」のところに出ている「いろいろな色」には「黒」、「白」、「赤」、「青」、「緑」、「黄色」、「茶色」、「空色」、「灰色」、「黄緑」、「真っ白」、「真っ赤」、「真っ黒」、「ピンク(ももいろ)」、「オレンジ(だいたい色)」、「むらさき」の16種類があげられているが、「むらさき」は落とされていない。8歳以上(ab acht Jahren)の子供を対象とした絵入りドイツ語辞典(PONS Junior Illustriertes Wörterbuch Deutsch, Stuttgart/Dresden, 1995)には約1900語の見出し語があるが、lilaはあるが、violettは出ていない。この辞書には色の名前を絵の具の絵といっしょに列挙している箇所があるが、そこではrot, blau, grün, gelb, grau, schwarz, weiß, braun, rosa, lila, orange(赤, 青, 緑, 黄, 灰色, 黒, 白, 茶色, ピンク, 紫, オレンジ)の11色があげられている。violettはやはりない。頻度リストで見るとこれまでほとんど使われてこなかったlilaを使

わせていこうという教育的配慮があるのかもしれない。

日本語の「紫」の日本語や日本文化における重要度について考えさせてくれる資料に Stanlaw (1997) がある。日本人 91 人に基本色彩語と考えるものをあげさせた調査結果がしめされている。色票などから選ばせるのではなく、直接基本的だと思う色の名前を答えさせたものである。総合順位が 10 位までを抜粋すると次のようになっている。

【日本語の基本色彩語】総合順位が 10 位まで
 (「96 / 22」は 22 人で 96 % という意味である)

	小学生	中・高	～25歳	26～45歳	46歳～	総合
	23人	9人	35人	18人	6人	91人
1. shiro	96/22	88/8	97/34	100/18	100/6	97/88
2. kuro	91/21	88/8	91/32	94/17	100/6	92/84
3. aka	100/23	88/8	94/33	94/17	83/5	94/86
4. ao	100/23	88/8	91/32	89/16	66/4	91/83
5. ki-iro	83/19	77/7	80/28	77/14	100/6	81/74
6. midori	96/22	66/6	74/26	72/13	50/3	77/70
7. cha-iro	65/15	55/5	51/18	66/12	83/5	60/55
8. murasaki	83/19	55/5	17/6	61/11	83/5	50/46
9. pinku	26/6	44/4	60/21	33/6	33/2	43/39
10. orenji	43/10	33/3	45/16	28/5	33/2	39/36

小学生 23 人のうち 19 人がもっとも基本的な色彩語として murasaki をあげたという。これは 23 人全員があげた aka と ao, 22 人の shiro と midori, kuro の 21 人に次いで多く、おなじ 19 人の ki-iro と並んでいる。cha-iro は 15 人しか基本的な色彩語としてあげられていないわけだから、小学生にとっては cha-iro よりも murasaki のほうが基本的な色彩語と考えられているのだろう。ところが、年齢層があがると、murasaki の評価はかなり極端な凋落傾向をしめしている。中学生や高校生では 9 人中 5 人だから半数近くに落ち込み、大学生および 25 歳以下 (35 人中 6 人) になると murasaki を基本的な色彩語としてみなしているひとは 6 人にひとり程度に落ち込んでいる。それがさらに年齢があがり、26 歳

から45歳の年齢層では、18人中11人だからまたかなり回復している。46歳以上のひとは6人中5人だから、ふたたび *murasaki* は基本的な色彩語として認識されていることになっている。パーセントで追うと、小学生から46歳以上まで、83% - 55% - 17% - 61% - 83% となっている。46歳以上に低く評価されている *midori* と大学生から25歳以下の年齢層に評価が高い *pinku* とならんで顕著な結果となっているように思われる。

小学生から大学生にかけてのこのような評価の違いは何によるものなのだろうか。紫色が小学生にとって基本色彩語であるのはなんらかの教育的効果によるものかもしれないが、小学生が紫色を好んで使うという事実はないらしい。それどころか、クレヨンで絵を描くような場合、紫色はあまり使われていないらしい。「小学生の低学年用に使われているクレヨンは6色、12色、24色、36色と各種の色相が選ばれて、大体標準色系に準じた色種である。それに灰、黒、金、銀などの中性色を加えられている。ところが紫系統の色はすくない。標準色から紫を省くということは、クレヨン画などに紫系統をあまり使わないからだそうだ」(宮下 1952, 178)。参考にアメリカのミルトン・ブラドレーの24色クレヨンの例があげられているが、紫系統の色として赤紫 (Red Violet), 紫 (Violet), 青紫 (Blue Violet) の3色があり、24色の日本のクレヨン (花王クレパス, あおとりクレヨン, ペンてる) が紫1色であるのと比較して紫系統の色が多くなっている。

6. 締めくくるにあたって

「青」か「紫」かはっきりしない状況で日本語では「紫」をえらぶ傾向があるように思う。この傾向は、黒っぽい茶色の醤油のことを「むらさき」と言ったり、緑色で濃淡があり、全体的に黒っぽい海苔や海苔の佃煮に「むらさき」が使われたりするのもこの傾向が関係していそうだ。一方ドイツ語には紫の色相を表わす語彙は外来語しかなく、日常の言語使用では、「紫」はあまり使われず、その分「青」が今日でも頻繁に使われ、おそらく多くのドイツ語のネイティブスピーカーにとっては「青」の一部である「青紫」だけでなく、場合によってはかなり赤に近い赤紫の色相にも「青」が使われることがあるようだ。同じものに対して紫といたり、赤と分類したりというのは日本語ではわりと見られる。「赤玉ねぎ」と「紫玉ねぎ」、「ムラサキツメクサ」と「アカツメクサ」などがある。食材関係の専門語のようであるが、アカジソの若芽を「紫芽 (むらめ)」

と言ったり「赤芽」と言ったりもする(『日本食材百科』)。この「赤」と「紫」でゆれる現象はかなり古くからあるようで、『邦訳日葡辞書』(岩波, 1980)にも *Murasaqidaicon* と *Acadaicon* が見出し語として採られていて, 「*Murasaqidaicon* と言う方がまさる」とあるから, 同一の野菜が紫や赤になったことは間違いない⁶⁾。ドイツ語では *rot* (赤) と *blau* (青) のあいだに同じような関係がある。日本語でやはり「紫キャベツ」と言われたり, 「赤キャベツ」と言われたりする野菜があるが, ドイツ語ではふつうには *Rotkohl* と「赤」が使われているが, 南ドイツやオーストリアでは *Blaukraut* と「青」が使われるとされている (*LGDaF 2*)⁷⁾。アーティチョークがドイツ語で「青」とされる場合があるのも同様のケースだろう。巨大な花を咲かせるアーティチョーク (*Cynara scolymus*, 和名はチョウセンアザミ) は, ヨーロッパでは古代ギリシア・ローマ時代から栽培されていたようだが, 栽培種しかなく, 野生のアーティチョークは存在しない。イタリアやフランスなどではアーティチョークのつぼみを好んで食べる。アーティチョークの花は巨大だが, 花の色は普通のアザミの色と変わりがないように見える。この花の色だが, 日本の図鑑やガイドブックでは紫や赤紫と記述されている。「赤紫色」(『ハーブ』), 「紫ピンク」(『ポケットガーデニング』, 小学館文庫, 1998), 「紫」(『ハーブ 新来の香草たち』, 朝日新聞社, 1987), 「紫色」(『マイペディア』, 平凡社, 「チョウセンアザミ」)。ところが, このアーティチョークの花の色を「青」とするドイツ語の園芸書があった。見出しとして *Artischocken – das blaue Wunder* (「アーティチョークー 青い驚き」とされ, 写真のキャプションに「大きなつぼみを咲かせると, 素晴らしい青い花に驚かされることになる (Wer die großen Knospen aufblühen lässt, erlebt ein blaues Blütenwunder.)」 (Brigitte Stein: *Dekorative Küchengärten*.)。ただ, 不思議なのは, 他にも, アーティチョークの絵で花の色を青にしたものが存在することだ。しかも, 紫みのない青なのである。ハーブなどを扱った本で青い花を咲かせる写真はないようであるし, アーティチョークに青花のものがあるという記述もないようである。青いアーティチョークの図譜は『ハーブ 新来の香草たち』に出ているものであるが, このような色のアーティチョークがあるとは思えないので, 紫色に青みを感じるひとが記憶で描いて, こうなったのではないかと想像したくなる。W. ウッドヴィルの『メディカル・ボタニー』という明治薬科大学資料館にある本からの図譜である。

色彩語の意味については, 外国の言語文化の影響も今日では強力である。たとえばバラの品種名にもブルーはわりとあるが, 本当に青いバラは今のところ

出来ていないらしく、どれも紫系統の花である。しかも、バラの本を覗いたことのあるひとならバラの品種にはブルーが付いたものがかなりあることを知っているだろう。ドイツで作出されたバラにも多い。Blue Moon, Blue River, Blue Bajou, Veilchenblau (以上4品種はドイツで作出), Blue Ribbon (アメリカ)などがバラ関係の本に出てくる。実は、これらは blue や blau が出てくるが、「青」ではなく「紫」のバラである。『すてきなバラ作り』(主婦の友, 1997)によると、Blue MoonとBlue Bajouの花の色は紫で、Blue Riverの花の色は赤紫になっている。ドイツ語では日本語で「紫」の花が「青」に分類されることがあるのを本稿では花の色の記述を比較することで見たわけだが、今日、園芸の世界は国際化されていて、バラの場合はフランス、イギリス、ドイツ、アメリカといった国々で作出されたバラが接木や芽接ぎされ、輸出されている。日本でもこういった外国産のバラが栽培されているわけだが、「紫」なのにブルーという名前と呼ばれているバラの存在は日本語の外来語のブルーの意味、また、ブルーと同義語と考えられている「青」の意味を少しずつ変えていくことになりそうである。事実、バラに親しむひととはもう専門語として青バラという言葉を使い、紫色のBlue Moonは「青バラの名花」(『すてきなバラ作り』)という言い方も使っている。

さらに、他の園芸植物の世界を観察すると、園芸草花では青くないブルーの花が多いのに気づかされる。「紫色の花が美しいブルーマロウ」は『ハーブ図鑑』(日本芸社, 1998)にあった表現そのものなのだが、「美しい紫色の花がたくさん咲くブルーマロウ」とも書かれている。「花が紫色のブルーサルビア」(『花屋』)というのものもある。「サルビアはスカーレットのほか、紫色、桃色や白色の花も改良されているが、黄色はまだない。」(湯浅浩史:『花の履歴書』, 講談社学術文庫, 1995, p.169)とあるから、日本語では青いとはまったく考えられていないようなのである。アガパンサスのことを英語ではBlue African Lilyとも言うらしい。品種名としてもBlue Moonというのものもある(Larousse Pocket Guide Garden Plants. London, 1995)。この本ではアガパンサスの園芸種の花の色もblueかwhiteになっている。これが日本語の世界では、やはり、「青」が消え、「紫」が出てきて、「紫色、または白の小花が多数集まって咲き」となる(『花屋』)。

じつは、日本語について外来語の色彩語と在来の色彩語で意味がずれていることをStanlaw (1997:250-251) がすでに述べている。日本語の在来色彩語の「青」と外来語の「ブルー」では50%レヴェルで(詳細は不明だが被験者の50%

まで一致した範囲という意味だろうか) ブルーのほうが色相が紫寄りにずれている。「青」がBP 2.5～BP 7.5なのだが、「ブルー」ではB 10～P 2.5になっている⁸⁾。これは園芸植物の状況などを考えると偶然ではないと思われる。

日本語の4大基本色彩語はアカ、アオ、シロ、クロであり、この四つだけが上代からその色名としての存在が確認されていると佐竹(1955)は述べている。今日でも単独での使用頻度、複合語の一部としての使用頻度が他の色彩語とくらべて高い。細かい色彩語の区別はせずにこの4大色彩語ですませてしまうということはよくあることで、安藤(1986)は「日本人が日常生活で身の事物の色彩に言及するとき、使用される色名は『シロ・クロ・アカ・アオ』の4色を出ることはまずない」と述べ、「白目/黒目」、「白ネズミ/黒ネズミ」、「赤ジソ/青ジソ」、「黒松/赤松」、「白土/黒土/赤土」、「白犬/黒犬/赤犬」、「白カビ/黒カビ/赤カビ/青カビ」、「白イ顔/黒イ顔/赤イ顔/青イ顔」などの例をあげている。そんな4大基本色彩語の一角を占めるアオやアカに対してムラサキはよく健闘している。ムラサキをアオと言う現象は見当たらない。アカについてもかなり赤いものしかアカにはならないようだ。オレンジ色の蜜柑や柿の色が今日でもアカと表現されることがあることを考えると、紫はよく健闘している。

しかし、日本語の紫色をめぐる状況は、伝統的な紫色の多用と特別視から開放されて、現在ではとくに頻繁に使用される色彩ではなく、紫色の工業製品はまれで、女性の衣類の流行にしても、かつて女性の着物の流行が紫色を中心に動いていたことと比較できるような状況にはない。小学生が「紫」を日本語の基本的な色彩語としてとらえているのは、かつての日本文化に果たしていた紫色の重要性の名残りなのかもしれない。紫色を取り巻く状況は日本文化のなかですでにかなり変わっており、日本語の中でのこの語の意味と用法も、今後、変化することもありうるように思われる。

【辞書・事典類の出典と略記方式】

切り花：『切り花図鑑』，小学館，1997

新潮100：『新潮文庫の100冊』，CD-ROM，新潮社，1995

新明解：『新明解国語辞典』，第5版，三省堂，1997

世界大百科：『世界大百科事典』，第2版，DVD-ROM，平凡社，1998

大百科全書：『日本大百科全書』，CD-ROM，小学館，1998

日本食材百科：『カラー完全版 日本食材百科事典』，講談社＋α文庫，1999

ハイブリッド：『ハイブリッド新辞林』，三省堂，1998

ハーブ：『ハーブ』，ヤマケイ・ポケットガイド4，山と溪谷社，1999

花屋：『花屋さんの花を見わける本』，同朋舎出版，1994

鉢花：『鉢花・育てる花』，小学館，1998

ブリタニカ：『ブリタニカ国際大百科事典』，電子ブック小項目版，TBSブリタニカ，1993

ペレニアル：『ペレニアルガーデン』，小学館，1998

DBW: Duden Bedeutungswörterbuch. 2. Auflage, 1985. PC-Bibliothek 版も利用.

dtv-Wahrig2: Wörterbuch der deutschen Sprache. Neuausgabe, (dtv), 1997. CD-ROM版も全文検索に利用.

DU: Duden Universalwörterbuch. 1989. 電子ブック版をテキストファイルで取り出したものを主に利用した.

LGDaF2: Langenscheidts Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache. Neubearbeitung 1998.

OED2: The Oxford English Dictionary Second Edition on Compact Disc. Oxford University Press, 1996.

SDP: Schülerduden Die Pflanzen. 1988.

SDT: Schülerduden Die Tiere. 1987.

ULdS: Ullstein Lexikon der deutschen Sprache. 1969.

WDW: Wahrig Deutsches Wörterbuch, Neuausgabe. 1980.

【注】

1) 語源からすると、violettはスミレの色、lilaはライラックの色である。辞書の記述では、lilaは明るい色(hellviolett)について使われるとしているものが多い。violettについては、dtv-Wahrig2には(dunkel)blaurot(「濃い」青赤(紫))と定義している。しかし、他の辞書では「濃い(暗い)」が語義の説明にはいっていない。dtv-Wahrig2の記述でも、「濃

い(暗い)」が括弧に入れられていることからゆれがあることがうかがわれる。また、辞書の記述を離れても、典型的な violett がどんな色なのか、また violett と lila の色の違いについては、ドイツ語のネイティブスピーカーでも判断が困難らしく、研究者のなかにも lila を violett や mauve などの上位概念とするひともいれば、逆に lila や Purpur を violett の下位概念としてあげるひともあるという (Lehmann 1998, 252)。

- 2) 紫檀は red sandalwood 以外にも rosewood とされる場合もある。ドイツ語では, rotes Sandelholz が和独辞典に出ているが, 電子ブック版クラウン独和辞典で全文検索すると, Palisanderholz も「紫檀材」の訳語がついているようだ。辞書の記述などがややあいまいなのは, この木材が単一の種類ではなく複数の木材の総称として使われる場合があることも関係があるのだろう。
- 3) 鈴木孝夫氏が注目しているのは人工物だけでない。「黄色」については, 「皮をむいたばかりの馬鈴薯」の色がフランス語ではやはり「黄色 (jaune)」とされ, 日本語の「黄色」の感覚とずれていることも指摘している。
- 4) ウラムラサキの学名を *Laccaria amethystea* とたぶん間違っで記載している本もあったが, *Laccaria amethystina* と記載しているものもあったから, まず同一種を指しているとみて間違いない。
- 5) Malina (Ingeborg Bachmann), Der Boxer (Jurek Becker), Ansichten eines Clowns (Heinrich Böll), Der Besuch der alten Dame (Friedrich Dürrenmatt), Stiller (Max Frisch), Die Angst des Tormanns beim Elfmeter (Peter Handke), Das dicke Kind; Adam und Eva; Märzwind; der Bergrutsch (Marie Luise Kaschnitz). Deutschstunde (Siegfried Lenz), Abwässer (Hugo Loetscher), Kindheitsmuster (Christa Wolf).
- 6) 現在日本で栽培されている大根の品種は「青首系一色になりつつ」あり, 赤や紫に見えるものは普通見かけないが, 現在でも「周囲が赤く中が白いもの, 紫赤色の筋入り」というような品種があるようだ (大久保増太郎:『日本の野菜』, 中公新書, 1995)。
- 7) SDP によると, -kraut と -kohl を替えた他の組み合わせ (Blaukohl, Rotkraut) も同じ種類のキャベツについて使われるとされている。また, このキャベツの色を blaurot (「青赤」≒「赤寄りの赤紫」と記載している (blaurote Kulturform des Gemüsekohls mit Kopfbildung (Kopfkohl)。
- 8) また, Stanlaw (1997) では, 日本語では英語からの借用語の色彩語 (ホワイト, ブラック, レッド, ブルー, イエロー, グリーン, ブラウン, パープル, オレンジ, ピンク, グレー) が在来の色彩語よりもより明度の高い色彩を指示する傾向があると指摘されている。

【参考文献】

- 安藤貞雄 (1986) : 『英語の論理・日本語の論理』, 大修館
- 伊原 昭 (1988) : 「日本文学と色彩語」, 『日本語学』, 1988年1月号, 32-40
- 江幡 潤 (1982) : 『色名の由来』, 東京書籍
- 近江源太郎監修 (1996) : 『色々な色』, 光琳社出版
- 川上元郎/小松原仁 (1999) : 『新版 色の常識』, 第2版, 日本規格協会
- 佐竹昭広 (1955) : 「古代日本語における色名の性格」, 『国語国文』, 二四-六
- 佐竹昭広 (1986) : 『古語雑談』, 岩波新書
- 尚学図書編 (1988) : 『国際版色の手帳』, 小学館
- 小学館辞典編集部編 (1986) : 『色の手帳』, 小学館
- 鈴木孝夫 (1990) : 『日本語と外国語』, 岩波新書
- 武井邦彦 (1975) : 『色彩の再発見』, 時事通信社
- 塚田 敢 (1966) : 『色彩の美学』, 紀伊國屋書店
- 富家 直 (1969) : 『色の意味』, 毎日新聞社
- 長崎盛輝 (1996) : 『日本の伝統色』, 京都書院
- 博学こだわり倶楽部編 (1991) : 『色の不思議 面白すぎる雑学知識』, 青春出版社
- 東山魁夷 (1979) : 「青の世界」, 『日本の色』, 大岡信編, 朝日新聞社, 171-177
- 樋口清之 (1983) : 「日本人の好む色 抄」, 『色』, 大岡信編, 作品社, 223-231
- 福田邦夫 (1979) : 『改訂 赤橙黄緑青藍紫』, 青娥書房
- 前田雨城 (1980) : 『色染と色彩』, 法政大学出版局
- 三浦寛三 (1984) : 『色の和名抄』, 創文社
- 水尾比呂志 (1979) : 「紫 — その花と歌と心」, 『日本の色』, 大岡信編, 朝日新聞社, 161-168
- 三宅 鴻 (1988) : 「私の色彩語感」, 『日本語学』, 1988年1月号, 27-31
- 宮下孝雄 (1952) : 『実用色彩学』, 光生館
- 村山貞也 (1988) : 『人はなぜ色にこだわるか』, KK ベストセラーズ
- 森 泉 (1992) : 「色彩語に見られる合成形容詞について」, 『慶應義塾大学日吉紀要』, ドイツ語学・文学, 75-101
- BERLIN, Brent / Paul KAY (1969) : Basic Color Terms. Berkeley / Los Angeles / Oxford, (University of California Press).
- GARMS; Harry (1969) : Pflanzen und Tiere Europas. München (dtv).
- GIPPER, Helmut (1955) : „Die Farbe als Sprachproblem.“ Sprachforum, Zeitschrift für angewandte Sprachwissenschaft I. 135-145.

- GIPPER, Helmut (1957) : „Über Aufgabe und Leistung der Sprache beim Umgang mit Farben.“ Die Farbe. 6, Göttingen / Berlin / Frankfurt (Musterschmidt-Verlag), 23-48.
- GIPPER, Helmut (1964) : „Purpur. Weg und Leistung eines umstrittenen Farbworts.“ Glotta 42, 39-69.
- HAYES, D. G., E. MARGOLIS, R. NAROLL, and D. R. PERKINS (1972) : “Color term salience.” American Anthropologist 74, 1107-1121.
- KÖNIG, Jenny (1927) : „Die Bezeichnung der Farben.“ Archiv für die gesamte Psychologie, 60, 9-204.
- KORNERUP, A. / J. H. WANSCHER (1963) : Taschenlexikon der Farben. Zürich, Göttingen.
- LEHMANN, Beat (1998) : ROT ist nicht >> rot << ist nicht [rot]. Tübingen (Gunter Narr).
- McNEILL, N. B. (1972) : “Colour and colour terminology.” Journal of Linguistic 8, 21-33.
- PEGEL, D. / G. RICKHEIT (1987) : Der Wortschatz im Grundschulalter. Hildesheim / Zürich / New York (Olms).
- STANLAW, James (1997) : “Two observations on culture contact and the Japanese color nomenclature system.” Color categories in thought and language. edited by C. L. HARDIN and Luisa MAFFI, (Cambridge University Press), 240-260.